



# 対がん協会報

1部70円(税抜き)

第643号

2016年(平成28年)  
12月1日(毎月1日発行)

公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です  
〒100-0006 東京都千代田区有楽町2-5-1 有楽町センタービル(マリオン)13F  
☎(03) 5218-4771 <http://www.jcancer.jp/>

主な内容

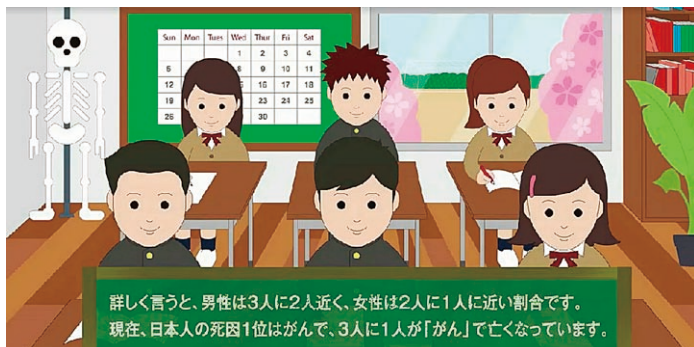
2面、3面 特集 がん教育  
4面、5面 RFLJ2016  
各地からのメッセージ  
8面 「がんと就労」シンポジウム開催

文部科学省選定作品に決定!

クイズ形式で楽しく学べる

## がん教育アニメ教材「よくわかる!がんの授業」が完成

日本対がん協会は、学校現場で活用できるがん教育のアニメ映像教材「よくわかる!がんの授業」を作成し、11月18日から日本対がん協会のサイト内の「がん教育」のページで、youtube動画として公開した。



随所に細かいしかけがあり楽しめる

「よくわかる!がんの授業」は、クイズ形式でがんについて楽しく学べるアニメ動画で、10月31日に中学生・高校生向き保健体育の学校教材として「文部科学省選定」の評価を受けた。学校教材としてだけでなく、一般の方にもがんの基礎知識が学べる内容になっており、保健所等でのセミナーなどでも活用できる。

### 好評のアニメ教材第3弾

日本対がん協会では、がん教育のアニメ教材としてこれまで「がんちゃん冒険」と「がんって、なに?いのちを考える授業」を作成しており、「よくわかる!がんの授業」は、その第3弾。いずれも、がん教育の第一人者である中川恵一・東京大学医学部附属病院准教授が監修した。

文部科学省は来年度からがん教育を

全国展開する方針で、同省は4月に「がん教育推進のための教材」の中で、がん教育で取り上げるべき9項目(①がんとはどのような病気でしょうか?②我が国におけるがんの現状③がんの経過と様々ながんの種類④がんの予防⑤がんの早期発見とがん検診⑥がんの治療法⑦がんの緩和ケア⑧がん患者の「生活の質」⑨がん患者への理解と共生)を示している。

今回のアニメ教材は、この9項目の内容に準拠しており、登場人物の生徒たちが、クイズに答えたり、先生の説明を聞いたりする様子を見ながら学べるようになっている。

身近にがんにかかった人がいる子どもへの配慮など、教材使用にあたっての注意喚起を目的にした「はじめに」と、9項目の内容に対応した1~9

話、健康と命の大切さへの気づきを目的とした「おわりに」の11項目で構成。各話に2~4問、計22問のクイズがあり、その回答、解説に加えて、各話で学ぶべきポイントを「今回のまとめ」として収録している。

さらに、このアニメ教材を授業で使用する際の「指

導の手引き」も作成し、PDFファイルとしてダウンロードできるようにした。アニメ教材の各話についての中川准教授からの補足・解説と、文部科学省の「がん教育推進のための教材」からの補足解説資料を掲載した。

### 教員向けDVD「Dr.中川がよくわかる!がんの授業」も作成中

日本対がん協会では、アニメ教材と補足解説資料に加えて、この教材を使って中川准教授が東京都東大和市立第五中学校で実施したモデル授業のダイジェスト版や、同准教授の各項目ごとの解説動画も収録したオリジナルDVD教材「Dr.中川がよくわかる!がんの授業」も現在作成中で、広く提供できるように準備を進めている。

(日本対がん協会 本多昭彦)

がん相談ホットライン 祝日を除く毎日  
03-3562-7830

日本対がん協会は、がんに関する不安、日々の生活での悩みなどの相談(無料、電話代は別)に、看護師や社会福祉士が電話で応じる「がん相談ホットライン」(☎03-3562-7830)を開設しています。祝日を除いて毎日午前10時から午後6時まで受け付けています。相談時間は1人20分まで。予約は不要です。

医師による面接・電話相談(要予約)  
予約専用 03-3562-8015

日本対がん協会は、専門医による面接相談および電話相談(ともに無料)を受け付けています。いずれも予約制で、予約・問い合わせは月曜から金曜の午前10時から午後5時までに☎03-3562-8015へ。相談の時間は電話が1人20分、面接は1人30分(診療ではありません)。詳しくはホームページ(<http://www.jcancer.jp/>)をご覧ください。

特集 **がん教育**

# 柔軟なカリキュラム生かし、講義やグループワークでがんを学ぶ

**神奈川県立横浜清陵総合高等学校** 講師：神奈川県立がんセンター 成松 宏人

日本対がん協会は11月14日、神奈川県立横浜清陵総合高等学校でがん教育の出張授業を実施した。講師はがん予防の専門家である成松宏人・神奈川県立がんセンター臨床研究所がん予防・情報学部部长で、「知っておきたいがんの知識」-がんの予防から治療まで-と題する授業を行った。



わかりやすく講義をする成松先生

同校はキャリア教育プログラムに力を入れている単位制の高校で、授業のカリキュラムもユニークだ。今回の出張授業は「健康ライフ」という科目の授業時間を使って行われた。担当する長瀬巴奈教諭は家庭科の教諭だが、「調理実習など通常の家庭科の内容以外にも、柔軟にカリキュラムが組めるんです。今回のがん教育の他、心理学の専門家による出張授業、ヨガなども企画しています」と話す。

授業は2時限通して行われた。1限目は成松先生による講義、2限目は講義の続きとグループワーク、対がん協会が完成させたばかりのがん教育用アニメ教材「よくわかる！がんの授業」の視聴を行った。

成松先生はまず「がんとは何か」からわかりやすく解説。がん細胞ができる仕組みやがんの症状は多様なことを説明し、がんの3大治療法などを紹介。今ではほぼ100%の人ががんと告知されることや、その時の患者さんの心境をつづった文章を読み上げると、生徒

し、グループごとにまとめて発表した。

最後に日本対がん協会の本多昭彦がん教育担当マネージャーが、対がん協会の取り組みを紹介し、アニメ教材「よくわかる！がんの授業」を上映すると、「かわいい！」などと声があがり、がんについてのクイズの答えに興味を示していた。

授業後に生徒が書いた感想にも「がん検診、超大切！家族にも伝える。」「がんにならないための予防は一般的にあたり前のことばかりだけど、わたしたち若い子はそのあたり前のことができてない気がする。自分は気をつけたい。」「がん検診の後が大切だと分かった。親に話す。早期発見、早期治療が大切と分かった。」「もっと一人ひとりががんについての知識を身につけるべきだと思った。」などと頼もしい言葉が並び、長瀬教諭も「私が思っていた以上に生徒たちの反応があった。生活改善につながってくれば」と話していた。

たちは驚いたように聞き入っていた。続いて専門の「予防」の話に移り、食事、喫煙、運動などの生活習慣に関する一次予防を「がんにならない新12か条」を例に引いて解説し、「当たり前のことを当たり前にする」と強調した。

がん検診の大切さも詳しく説明。がん検診のメリット・デメリット、がんのステージごとの5年生存率などをわかりやすく説明した。参加した30人ほどの生徒たちのほとんどは女子だったが、小林麻央さんのがん闘病のニュースなどで関心が高まっているようで、活発に質問をして熱心に聞いていた。

2限目には、生徒たちが5人ほどのグループにわかれて、成松先生が出した「みなさんができるがん対策を提案してください」という課題に取り組んだ。①誰を対象に②どんなことをしますか？③それはどんな効果が期待できますか？という難しい課題だったが、生徒たちは熱心にディスカッション



活発に意見が出たグループワーク

## 横浜清陵総合高校の生徒が考えた「がん対策」

対象	何をする？	どんな効果がある？
親世代以上	運動させる、お酒を控えさせる	がん予防
10代～20代	お弁当を自分で作る	自炊に慣れて将来自立した時に良い食生活をできるようにする
10代男女	今日のような授業を行う	がんについての知識と関心を高める
20代以上の横浜の人	がん検診の時期の前に駅前で呼びかける	検診推進
家族	食生活の見直しと家族でランニング	家族が健康になる



# がん教育の公開研究授業

## 授業の進め方などを議論

### 筑波大学附属中学校



アニメ教材「がんってなに?いのちを考える授業」も使われた公開授業(筑波大附属中学校提供)

東京・文京区の筑波大学附属中学校で11月12日、がん教育の公開授業と、その授業内容を議論する研究協議が開かれた。同校が毎年開催している研究協議会の中の一コマで、文部科学省が来年度からがん教育を全国的に展開する方針を示していることから、沖縄県や島根県など各地の学校教育関係者約50人が参加し、がん教育の授業の進め方について議論を交わした。

公開授業は同校保健体育科の関野智史教諭が、3年生41人のクラスで「がんを考える」をテーマに保健体育の授業として実施された。関野教諭は、「がんを知る」「がんと闘う」「がんを防ぐ」の3時限の研究授業を組み立て、この

日は2時限目の「がんと闘う」の授業を公開した。

冒頭に、日本対がん協会が作成したアニメ教材「がんってなに?いのちを考える授業」を使って、1時限目の「がんを知る」の授業で学んだ内容を復習。その後、生徒を数人のグループに分け、がんの治療法を思いつくままにふせんに書き出し、それぞれのメリットやデメリットについて議論をさせた。

その中で関野教諭は、がんの治療には、手術、化学療法、放射線治療の3大療法があり、さらに重粒子線治療などの先進医療もあることを紹介し、生徒たちの議論を通して、がんの治療法は一つだけではなく、様々な治療法が

組み合わせられていることや、選択肢があることを理解させていた。

公開授業後の研究協議では、同校の校長で、文部科学省の「がん教育」の在り方に関する検討会の委員でもある野津有司筑波大学教授が、公開授業を講評するとともに、がん予防の知識を楽しく学ばせる手法などを解説。「塩辛い食品は控えめに」など、健康にかかわる行動項目を1番から30番まで読み上げて、その中でがんの予防にかかわると思った番号を書き取って、9マスの表に数字を入れて、ビンゴゲームをさせる方法を紹介していた。



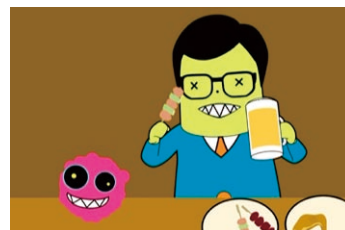
がんの治療法をふせんに書き出し議論する生徒(筑波大附属中学校提供)

## 映像教材が人気「がんちゃん」在庫切れに

「がん教育基金」へのご支援をお願いします

がん教育動画教材(DVD)が好評だ。日本対がん協会では2011年より順次「がんちゃんの冒険」、「がんって、なに?いのちを考える授業」、「Dr.奥仲の熱血出前授業」の3作品をリリースし、学校教育現場には無償で提供している。

現在も連日のように提供の申し込みがあり、今年(2016年1月から現在まで)は150ヶ所以上に3作品総枚数1,500枚超を配布した。提供先は小中高等学校や、子供達へのがん教育を扱う行政・医療機関などで9割を占める。



生活習慣への注意喚起も

視聴の感想は一律に「子供達へのわかりやすさ」、「授業等での扱いやすさ」が挙げられている。最近では、近隣の学校や病院などから本教材を勧められたので是非提供して欲しい、という申し込みが増えた。既に入手・活用され

ている方々からの口コミ評判も上々ということだろう。

また、本来は児童生徒向けのがん教育用に制作したものだが、企業において従業員の健康管理等に活用したいといったニーズもあり、有償にはなるが、非営利目的での利用であれば喜んで配布している。なお、希望の大変多い「がんちゃんの冒険」は在庫がなくなったため、残念ながら現在提供を中止しているが、他の2作品についてはまだ提供可能だ。

(日本対がん協会 松浦幸彦)



# 特集

# リレー・フォー・ライフ・ジャパン (RFLJ) 2016

# 各地からのメッセージ

## ごあいさつ

今年はRFLが日本でスタートしてから10周年になりました。

1年間の活動のハイライトとなる24時間ウォークイベント、リレー・フォー・ライフ・ジャパン(RFLJ)は、2006年に茨城・つくばでのプレ開催、2007年に2地区での本格的な開催以来年々開催地区が広がり、今年は全国49地区で開催されました。

今年は5月14日、15日の和歌山か

らスタートして、11月12日、13日の新横浜及び浦添(沖縄)でラストを迎えました。参加者の皆様、関係者の皆様、そして各実行委員会の皆様に厚く御礼申し上げます。

今年も各地区で再会による喜びや亡き人への追悼、また来年に会おうと約束しあう感動的なシーンが繰り広げられました。初開催は苫小牧(北海道)、甲府、滋賀医大、高松、美祢(山口)の5地区でした。愛する家族に旅立たれた、ご自身がサバイバーだったりなどがんと関わり

を持たれた方が、熱い想いを胸に立ち上がり活動されてきました。滋賀では地元大学生が実行委員会を結成し、国内初の「カレッジリレー」として開催された事が話題となりました。

今年4月に熊本地震により延期を余儀なくされていた熊本でのリレーイベントが、実行委員の皆さんの強い想いにより10月15日、16日に開催。全国各地からも仲間が応援に駆けつけてくれました。

天候不順で風雨に見舞われた地区も

ありましたが、大きな事故もなく終了した事は各地区実行委員会、関係者皆様のご尽力によるものです。

まだリレーイベントに参加された事のない方、是非来年はお近くの会場へ足を運んで下されば幸いです。

RFLについて詳しくお知りになりたい方はRFLホームページまたはRFLフェイスブックをご覧ください。

(日本対がん協会 リレー・フォー・ライフ担当マネジャー 中島盛荘)



笑顔でウォークRFLJくまもとにて

## 初開催を終えて

RFLJ2016やまぐち実行委員会 副実行委員長 國光 由美子



國光 由美子さん「ちよるる」と並んで

今年、ようやく山口でもリレー・フォー・ライフ・ジャパンを開催することができました。これまで、開催は難しいのではないかと言われていましたが、対がん協会山口県支部(山口県予防保健協会)の方がリレー・フォー・ライフに興味を持って下さっているというお話を頂き、2015年の春に船崎実行委員長という素晴らしい方が手をあげて下さったお陰で、今回の初開催に至りました。

山口県支部が実行委員会事務局としての役割をすべて担って、積極的に動いて下さったお陰で、私たち実行委員はイベント出店での募金活動&PR活動などの活動に集中することができました。

「こじんまりとした、自分たちも楽しめる温かいリレーにしよう」を目標に準備を進め、いろんな立場の人が語り合える場を作りたいと、「語り合おう つながろう」をスローガンに掲げました。

山口県のマスコット「ちよるる」の山口弁

ラジオ体操は、「癒された」と参加者の皆様に大好評。ほかにも、マジックショーやオカリナ演奏、フラダンスなどで皆様に楽しんでいただけたのではないかと思います。

また、同日にリレーを開催していたオーストラリア・サマーセットとの姉妹リレーも実現。当日はオーストラリアのリレー会場とSkypeで繋いで「がんにはできないこと」という詩を交互に読み、最後に「ワンワールド・ワンホープ」と合唱し、思いを共有しました。

至らない点もたくさんあったと思いますが、参加者の皆様から「心温まるリレーだった」など、多くの嬉しい言葉をいただきました。参加者だけでなく、実行委員も楽しむことができたリレーになったのではないかと思います。

これも、山口県支部がしっかりとサポートし、見守って下さったお陰だと思ひ、閉会式にサプライズで感謝状をお送りしました。これからも「RFLJやまぐち」を毎年続けていけるよう、皆様と手を取り合い共に活動していけたらと思います。



小さなリレーヤーもウォーク

## RFLと私

RFLJ2016室蘭実行委員会 事務局長 小田中 稔



橋をバックに浮かび上がるHOPEの文字

私とRFLの関わりは、両親をがんで亡くしていたこと。特に母の場合、腹痛のため検査を受けた時には、ステージⅣの大腸がんが発見され、もっと早く検診を受けさせていればとの後悔の念が消えずにいたことです。その後、北海道がん対策推進条例制定のため署名運動などの活動をされていたRFLJ室蘭の初代実行委員長である金子明美さんと知り合い、2008年に室蘭でRFLJを開催したいとの思いを知り、会場班としてお手伝いをさせていただいたのが始まりでした。

RFLJ室蘭は、今年で9回目を無事終了することができました。自分自身は、3回目からは事務局長としての参加ですが、とにかく無事終了させるという思いから事務的な感じになってしまいがちです。そんな中、今年は、特に実行委員会女子部が、サバイバーの皆さんにどう楽しんでいただくか、がん啓発をどのようにしたら理解が深められるか等々、11回の実行委員会のほ

か何度も女子部会を開催し、様々な企画を練り、形にして当日を迎えることができました。そんな実行委員の熱い思いもあり、参加された皆さんにも喜んでいただいていたのではないかと思います。

また、室蘭市ではRFLの開催をきっかけに、少しずつではありますが、がん撲滅に対する広がりを見せています。私自身、市議会議員としてがん対策について何度も取り上げていますが、昨年、北海道内の市町村で初めての「がん対策推進条例」制定につながりました。現在は、患者、行政、議会、報道、企業、医療が六位一体としてがんに取り組む「室蘭がんフォーラム」の発足など、全市的ながん撲滅の取り組みが進み始めています。

来年のRFLJ2017室蘭は、第10回目の記念すべきイベントとなります。がん撲滅の思いを胸に10年を振り返りながら次の10年に向けたイベントしたいと思っています。皆さん、ぜひ室蘭にお越しください。



小田中 稔さん 2016年度キックオフ会議で

## RFLJ2016滋賀医科大学を開催して

RFLJ2016滋賀医科大学実行委員会 実行委員長 西 明博

「RFLJ2016滋賀医科大学」が終わって2ヶ月ほど経ちました。お焚き上げや報告書作りも終え、ようやく一段落しましたので、RFLを開催しての所感を述べたいと思います。

### 【開催までの大変だったこと】

実行委員にサバイバーはおらず、ケアギバーの経験がある人も僅かだったため、RFLにかけける気持ちという点で温度差がありました。医学生・看護学生は試験や実習が多く、なかなか集まって話し合うこともできず、気持ちがバラバラになってしまっていました。

状況が変わったのが7月に企画した実行委員とサバイバー・ケアギバーの交流会でした。がん患者・家族としての経験やRFLへの思いについて直接お話を伺いました。この会を通して、学生である自分達がRFLを開催することの意義や目的を再確認し、そして「あの人達に喜んでほしい」という思いで、メンバーが一つになった気がしました。

### 【印象に残ったこと】

リレー1日目の深夜、土砂降りが会場を襲いました。降り止まない雨の中、会場を



夜越えのガッツポーズ

かけまわり、体は冷え、疲労はピークに達しました。ウォークを中断したほうがいいのか悪いのか、閉会を早めたほうがいいのか悪いのか、と色々なことを考えました。そんな弱気な心に勇気くれたのが、土砂降りの中、楽しそうに歩き、フラッグをつなぎ続けている参加者の姿でした。その姿を見て活力が湧き、最後までやり通すことができました。

がん患者さんはもっと辛い気持ちを抱え、夜を過ごしているのだと思います。だからこそ「夜通し」歩き続けることが大切なんだと感じました。

### 【今、思うこと】

歩くだけの単純なイベントがこんなに特別な意味を持つのは、がんに関わるたくさんの人の思いや協力の先に、この24時間があるからなのだと思います。「場」が持つ力のすごさや可能性をあらためて感じています。

医学生としてRFLに関わったことは、将来医師として働く上でも大変意義のある経験となりました。右も左も分からない私に懇切丁寧にアドバイスを下さった協会スタッフの是澤さん、私達をいつも励まし、勇気付けてくれたHappinessの皆様、応援・協力して下さった全ての皆様に心より感謝いたします。ありがとうございました。



西 明博さん



## Topics

# 遺贈セミナー開催 3月17日には大阪でも



講演する垣添会長

公益財団法人日本対がん協会は11月18日、東京・千代田区の有楽町朝日ホールにて「遺贈セミナー」を開催し、約40名が参加した。

「遺贈」とは、遺言書によって自身の財産の受取人や内容を指定すること。遺贈は遺言書を残すことで可能になり、故人の遺志として民法が定める法廷相続の規定よりも優先される。ここ

数年、自分の死後に財産をがん征圧に役立てて欲しいと遺贈を希望する問い合わせが増えているだけでなく、相続税対策としても関心が高まっている。

セミナーの第1部は日本対がん協会の垣添忠生会長による講演「人はがんはどう向き合うか?」。垣添会長は自身や妻のがん体験や、妻を看取ったあとの辛く悲しい経験を交えながら、がんも人の生き方も多様であること、患者だけでなく残された家族にもケアが必要であるということ、そしてがん経験者を特別視しない社会をつくるのが大事だと語った。

第2部は三井住友信託銀行財務コンサルタント平野常男氏による講演「や

さしい相続・遺言の話」。平野氏は、遺書と遺言は全く違うという基本的なことから、正しい遺言は家族・相続人の精神的・物理的負担を軽くすること、家族構成やそれぞれの事情、起こりがちなトラブルなど具体例を挙げて解説した。

質疑応答では、参加者から「生前贈与も考えている」、「相続人不在の場合、資産はどうなるのか」、「不動産の遺贈は難しいか」など具体的な質問が出され、関心の高さがうかがわれた。

「遺贈セミナー」は来年3月17日に大阪でも開催される。お問い合わせは ☎03-5218-4771 日本対がん協会企画・事業担当まで。

## 部位別がんの現状明らかに

# 日本医師会と日本がん登録協議会がシンポ

日本医師会と日本がん登録協議会は11月12日、「本当に増えているがん、減っているがんーがん登録推進法施行1年を経てー」と題するシンポジウムを東京・文京区の日本医師会館で開催した(日本対がん協会など後援)。

平成28年1月に「がん登録等の推進に関する法律」が施行されて1年。全国の正確ながん患者に関する診療情報を収集・分析する仕組みができたが、このデータを実際のがん対策に反映できるのはもう少し先になる。

そこで今回は法律が施行される前の約20年間の間に、日本人のがんで本当に増えていたがん、減っていたがんはどれか、変化の原因はなにかを、これまでの地域がん登録事業で得られた情報から検証し、今後のがん対策に生かすためのシンポジウムを開催した。

第一部では、減っているがん種である胃、肝、男性肺のトレンドの報告と分析を西野善一・金沢医科大学医学部公衆衛生学教授が発表し、増えているがん種である女性乳がん、子宮頸がん



パネルディスカッションで意見交換

のトレンド分析を伊藤ゆり・大阪府立成人病センターがん予防情報センター主任研究員が報告。「注目のがんのなぜ?」と題して、斎藤博・国立がん研究センター社会と健康研究センター検診研究部長が前立腺がんについて、津金昌一郎・国立がん研究センター社会と健康研究センター長が甲状腺がんについてそれぞれ解説した。

胃がん、肝臓がんについては原因となるピロリ菌やC型肝炎ウイルスの感染者の減少が寄与していると考えられるが、肺については慎重に罹患状況の推移を見守る必要があることや、子宮頸がんについてはHPVワクチンについての政策の変化による影響が今後出てくるであろうこと、前立腺がんは罹

患率が増えているが、死亡率は減少しており、過剰診断の利益の方を問題とすべき、などの報告があった。

続いて片野田耕太・国立がん研究センターがん登録統計室長が「日本のがん罹患の将来像」と題して日本のがんの2035年までの将来予測を報告した。それ

によると2035年には一番罹患が多い部位は前立腺だが、胃がん、肺がんも主要ながんのまま残ることが示され、その理由としてこれらのがんの原因は減っているが高齢化が同時に進行しているためと説明した。

その後のパネルディスカッションでは、日本のがん罹患の実態を把握し、適切な対策を立てるためには、年齢調整罹患率や死亡率を指標にした方が良いと言う意見が相次いだ。最後に垣添忠生日本対がん協会会長が「学問的には年齢調整を指標にするのが良いと言うのは理解できるが、一般的にはわかりにくいので、一般の方々への説明をきちんとやっていただきたい」と要望してシンポジウムを締めくくった。

## Topics

## 髪の悩みを相談 女性のがん患者向け美容セミナー 「ほほえみセミナー ビューティー教室&カフェ」開催



お茶を片手にリラックスして参加

11月12日、東京・千代田区の有楽町朝日スクエアで「ほほえみセミナー ビューティー教室&カフェin有楽町」(主催：日本対がん協会、協力：カネカ、一般社団法人HWBPヘアウェアビューティープログラム)が開催された。「脱毛に伴うストレス軽減のヒント」と題した講座では、講師でHWBP代

表の山岡純三さんが脱毛時と自毛回復時の具体的な対策や、ウィッグの種類やお手入れ方法、ウィッグを購入する際の目安や若々しく見える髪型のポイントなどを、スライドとデモンストレーションでわかりやすく説明した。

「ウィッグ体験コーナー」では、ヘアスタイリストがその人に似合うウィッグを選び、装着の際のコツやお手入れ方法、スタイリングなどをアドバイスした。「頭皮診断コーナー」では、頭皮をスコープで見ながらプロが頭皮の状態に合ったシャンプーやマッサージ方法などを説明した。

参加者からは「そろそろウィッグを外したいと思っていたので、短くてもおしゃれに見える髪型を提案してもらい参考になった」「治療後の脱毛は不安だが、段階に合わせておしゃれを楽しもうという気持ちになった」「脱毛時は頭皮のケア方法に悩んだ。もっと早く知りたかった」などの感想があった。



山岡純三さん

東京のヘアサロンに勤務後NYへ短期留学し、海外のウィッグ文化に触れた事が大きな転機となり、帰国後ファッションショーやCM撮影に使うウィッグの開発・提供に関わりました。その経験から、美容師が作るウィッグ・ヘアウェアを発想し、髪の悩みを持つ方がヘアファッションを楽しめる環境のために美容師の教育と普及活動を行っております。

現在は岡山大学病院内のヘアサロン運営にも関わっています。それぞれの患者様に合わせた美容ケアの提供で、毎日を少しでも気分よく過ごしてもらいたいと願っています。

## ラルフローレンが高尾山で「ピンクポニーウォーク」を開催

ラルフローレン株式会社(東京都千代田区)が、がんの早期発見、診断、治療に関する知識向上、医療格差の改善を目的に世界各国で行っている「ピンクポニーキャンペーン」の一環となるイベント「PINK PONY WALK」を10月13日に高尾山で開催した。

「ピンクポニーキャンペーン」は、同社のトレードマークであるポニーをピンクにカラーリングした「ピンクポニー」をあしらった限定商品を販売し、売り上げの一部を世界各国のがん啓発団体などに寄付する活動で、日本では



高尾山頂に約200人が集合

日本対がん協会を寄付先とし、2003年から同協会の活動を支援し続けている。

例年は都心をウォークしていたが、今回は趣向を変えて高尾山でのトレッキングに。同社社員とその家族ら約200人の参加者がピンクポニーTシャツを着て参加した。あいにくの曇り空だったが、参加者たちは和気あいあい、歩きながらも楽しげな笑い声や会話が途切れなかった。揃いのTシャツが目を引くのか、登山者や高尾山で働く人らに「これは何のイベント?」「おしゃれなTシャツですね」などと声をかけられることも多く、参加者は「ラルフローレンです。がんの早期発見・治療のためのチャリティ活動をしてい



アレックスandro社長から激励のスピーチ

ます」と答えるなど、歩きながら啓発活動を行う姿も見られた。

山頂で全員が集合し、ラルフローレン株式会社のアレックスandro・ラニョーロ代表取締役社長と日本対がん協会の黒岩由香利マネージャーが挨拶し、全員で集合撮影を行った。このイベントは啓発活動であるだけでなく、普段別の場所で働いている社員同士が交流し親睦を深める機会にもなっている。



# 厚労省研究班と共催 **がんと就労に関するシンポジウム開催**

東京・千代田区で11月5日、がん患者と就労に関するシンポジウム、「がんサバイバーシップシンポジウム2016 がんと就労～地域コミュニティへの展開」が開催された。同シンポは平成22年から続く厚生労働科学研究(がん対策推進総合研究事業)の研究費プロジェクト、「がんと就労」研究班の活動の一環で、公益財団法人日本対がん協会が共催した。



熱気あふれる会場

当日はがんと就労に関する最新の政策や研究の紹介や、研究班の活動報告のほか、東京、宮城、愛媛などで展開されている、医療機関やNPOなどによるがん患者就労支援の実践活動が紹介された。がんの生存率が高くなり、慢性病ともいわれるようになった現在、がん患者の就労支援は社会にとっても重要な意味を持つようになっている。会場には約150人の聴衆が詰めかけ、関心の高さを伺わせた。

始めに研究代表者の高橋都国立がん研究センターがんサバイバーシップ支援部長が、近年の国の政策の概略を紹介するとともに、2016年度の研究班の活動報告をした。

## 高まる社会的関心

高橋部長はがん治療と就労の両立の問題に対する社会的関心が非常に高まっていると強調。メディアや患者支援団体、医療系学術団体を始め、経済団体や都道府県行政が取り上げたことにより、問題が可視化され、企業経営においても「健康経営」や「ダイバーシィマネジメント」をキーワードに関心が高まっていると解説した。加えて、昨年発表された「がん対策加速化プラン」の柱の一つに「就労支援」が盛り込まれたこともあり、ハローワークの就労支援ナビゲーターが病院に向き、相談を行うなどの新しい動きがあることなどを紹介した。

患者や関係者向けの支援サービスも

増えており、研究班でもこれまでにがんと診断された人向けのQ&A集「がんと仕事のQ&A」を作成したり、企業向けに一般書籍「がん就労支援マニュアル」を制作・発行してきた。

## 医療者向け支援ツール作成中

続いて同研究班で医療者向け「就労支援ガイドブック」の作成を担当する国立がん研究センターの研究者でコマツの産業医でもある平岡晃氏によるガイドブック作成過程の報告、錦戸典子・東海大学健康科学部教授ががん就労支援を中小企業にも広げるための調査研究結果を実例を挙げて報告した。

平岡氏は、厚労省のガイドラインの公表により、今後医療機関(治療医)が「就業上の配慮に関する意見書」を作成することになったが、どのようなことに気を付けて書いたら良いのか医療者

をサポートするツールの作成が急務だったと語り、「職場復帰可能という判断について、具体的な基準は?」「意見書どおりに働いた患者に問題が起きた時、責任は治療医にあるのか?」などのQ&Aやコラムで構成した医療者向けガイドブックを作成中だと報告した。

錦戸教授は各都道府県で行われた、がんと就労に関する調査報告のレビューを行った

他、5社にインタビューを実施したことを報告。中小企業では社長の方針ががん就労支援のあり方についても大きな影響を及ぼすこと、良好な実践事例を広げることが大切だなどと話した。

シンポジウムでは各地のがん就労支援の実践事例も報告された。がん患者のための就活セミナーや、就活相談を行っている、一般社団法人CSRプロジェクトの藤田久子氏や、がん患者や家族、雇用者、医療従事者などの相互理解をはかる「就労支援カフェ」を開催している、石巻赤十字病院がん相談支援センターの佐藤京子氏らを取り組みを発表し、参加者から多くの質問が寄せられた。



患者向けQ&A集

## シンポジウムを終えて



おかげさまで大きな反響をいただきました。医療、患者、企業、行政などさま

ざまな立場からの報告で構成したためか、全体のバランスが良かったという声が多かったです。参加者のアンケートも裏面までびっしり書いてくださる方も多く、関心の高さや現場の切実さを感じました。国がガイ

国立がん研究センター 高橋 都  
ドラインを出した影響も大きいですが、この問題への解決を求める土壌が既にあったのだと思います。

がんになっても働きたい人がフェアに働けるようになることが大事だと思っています。



終了後に出されたアンケート